

『ぼくはイエローで ホワイトで ちょっとブルー』

その（3）

（ブレディみかこ）



Kouichi Abe
安部 光壹

『タンタンタンゴはパパ二人 』

ブレディみかこの「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」の魅力は、

今まで、うっすらと描いていた、イギリスGBのイメージとこの本の言わんとする白人（低所得者）労働者から見たイギリスGBとが全く違うところから来ていると思う。

私のイギリスGBのイメージは、
マグナカルタに始まる民主主義発祥の国、法の支配の国、
そして、世界を制覇した国である。

それが、今、凋落（日の名残り）の末にEU離脱を選択してしまった。

それは何故か？
誰が選択したか？である。

そんな疑問を持ってこの本を読むと、
最後に残された切り札は、みかこが言いたいのは、
「多様性」の力である。

そう言ってもピンとこないコンサバ（私の様な保守派）
にわからせようとしたのがLGBTに関わる以下のエピソードである。



中々、難渋で一度では分かりにくい。
LGBT が、嫌いな人は、反吐が出るかもしれない。

イギリスの幼児向け絵本の話である。
イギリスの保育所ではバイブルとなって、
人気を呼んでいる絵本がある。
そのタイトルは、『タンタンタンゴはパパふたり』

イギリスのブライトンと言う、LGBT にとっては
イギリスのゲイキャピタルという位に先進的な街に住んで、
保育士の仕事をしているブレディみかこは
この本を何十回となく幼児に読んであげるのだそうだ。

ニューヨークのセントラルパーク動物園で
恋に落ちた二羽のオスのペンギンのストーリーである。

【ペンギンたちが子どもを作る季節が来て、卵を産み、温めているのを見た二羽の
オスのペンギンたちが、卵に似た石を拾ってきて温め始める。

それを見た飼育係が、二羽はカップルなんだと気づき、
放置された卵を二羽の巣に置いておく。

するとそのカップルのペンギンは交代で、卵を温め、やがてペンギンの赤ん坊が誕生し
て二人はパパになり、赤ん坊はタンゴと命名される。】

たったそれだけの話である。

子どもたちは、この話を何十回も聞きながら
それでも、毎回、じっと、楽しそうに聞く。

ストーリーの中で、子どもたちは、
飼育係が、二羽のペンギンはカップルだと
気づくシーンが大好きで、



飼育係が

” They must be in love.”♥️と言うと、

その言葉を待っていたかの様に

二十数名の幼児が一斉に、” They must be in looooooove!”♥️♥️と叫ぶ。

3、4歳で、性を意識し出すイギリスの子供たちが喜ぶ圧巻のシーンらしい。

子どもたちは、「誰と誰が」恋に落ちるかではなくて、

「恋に落ちる」という部分が重要だとみかこは言う。

(※ 私は、誰と誰かが大事であると思うが、ここは、彼女の意見に従う事にする。)

子どもたちは、ペンギンの赤ん坊が「タンゴ」という名に

なった意味もわからない。

これは、タンゴは二人で踊るものだという政治的なフレーズでも

よく使われるが、ここでも、性別はともかくとして、

『二人で』、子供を作ることが強調されている。

子どもたちの間では、性別を離れた子育ての話が、延々と続く。

「タンゴもジェームスもパパが2人だからいいなあ。

ぼくもパパが2人がいい。」

保育士をしているみかこがその子に聞いてみる。

「なんで、パパが2人の方がいいの？」

「だって、3人でサッカーできるもん。」

すると、隣から別の子が言う。

「えーっ、ママが2人の方がいいよ。」

「なんで？」

「だって、ママの方がサッカーうまいもん！」

「僕んちは、ママだけ。でも時々ママのボーイフレンドが来る。」

「うちは、パパ1人とママが2人。一緒に住んでいるママと週末に会うママ」

「うちのパパはいつもはパパなんだけど、仕事に行く時は着替えてママになる。」

子どもたちは、自分の家族が他の子の家族と

違うことを全く気にしてなかった。



それぞれ、違って当たり前で、
それをいいとも悪いとも考えた事がない。

みかこはまた、
「よし、じゃあ、もう一冊読んでみよう！今度は、何がいい？」
すると、子どもたちは、
「もう一回読んで！」
「えーっ、また読むの？ じゃあ今度は誰かに読んでもらおうかな。
君たち、もう暗記しているから、この椅子に座って読んで頂戴！」
と言うと
子どもたちは、一斉に、「ミー！」「アイ キャン」「ミー、ミー、プリーズ」
と叫び始める。

なんと言う光景だろう！

読んでいる私には、しばしついていけない光景だった。
みかこは、そこで次の様に、感想を述べる。

「それにしても、幼児たちの世界は、何とカラフルで自由な子たちだろう。
子どもたちには、『こうでなくちゃいけない』の鋳型がなかった。

男と女、夫婦、親子、家庭。『この形が普通』とか、『これはおかしい』の概念や、
もっと言えば『この形は自分が嫌いだ』みたいな
好き嫌いの嗜好性さえなかった。
そうしたものは、成長するとともに何処からか、
誰かからかの影響が入ってきて形成されるものであり、
小さな子どもにはそんなものはない。
あるものをあるがままに受容する。

みかこは、最後に『幼児は、禅の心を持つアナキストだ』と言う。

みかこは、とうとう、異性による結婚がどうして、
結婚の前提視とされないといけないのかと言う。



かなり過激な主張に見える。

彼女曰く

「昔、女性は、結婚によって夫と同一化されることを余儀なくされた。つまり、女性は、結婚によって消えたのである。(168頁)。
19世紀後半まで、米国では、結婚すれば法的にあらゆるものは夫に取られた。妻が持っていた財産も稼ぎも、全て夫のものになった。妻に対する暴力を取り締まる法もなかった。主人に持物を没収され、暴力を振るわれても犯罪にならない。これは、なにかと言え、奴隷と同じである。近年、結婚の平等という言葉が欧米では盛んに使われる様になったが、男女の不平等性を抱えたままの異性婚とは違う。家父長制度から全く自由な関係性が、同性婚にはある。それは、伝統的な婚姻制度にとっては、脅威になるだろう。」

私には、正直言って、段々について行けなくなった部分はあるが、然し、私は、初めて、LGBTの「当たり前性」が、おぼろげながら、理解の視界に入って来た。

それは、彼女は、多様性の力と言っているが、私に言わせれば、彼女自身が別の章で述べていた「他人を理解する能力」(empathy quality 共感能力)と同じ意味に聞こえて来た。それなら、私も理解できる。

そして今、イギリスが起死回生で取り組んでいることは、この多様性を原点として、もう一度、イギリスの価値観を再構築しようと言う意気込みではないかと思った。



ある意味、これは革命である。

忘れもしない2016年6月、
全世界をあっという間に驚かせた Brexit（英国の EU 離脱）の
国民投票と同じ流れがあると感じた。

でもそこまでしない事には、イギリスも世界も病みすぎている。
そんな風を感じた。